

平成 26 年度新課程用

教科書の横顔

商業 317 新財務会計 I

本書は、旧課程の教科書「新会計」の内容および章の構成を継承しており、スムーズに移行できます。また、簿記の授業で「株式会社の会計」（全商 2 級範囲）の内容を扱えなかった学校が使用しても不都合なく学べるよう配慮しています。

第 1 章「企業と会計」は、「企業会計とは何か」という難しい内容を易しく説明しているのが特徴です。本章では管理会計との違いから、財務会計の機能、そして基礎的前提となる会計公準を分かりやすく示し、その後に会計の歴史を説明しています。新学習指導要領に「企業会計に関する法規や基準の変更」に随時対応して」とありますが、本章の学習がベースとなればより深い理解が期待できるでしょう。

第 30・31 章「連結財務諸表の作成」は、新課程より新しく加わった内容のため、生徒と授業者が共に理解しやすい内容にしました。①子会社の時価評価②株式の一括取得③純利益の振り替え④債権・債務の相殺（借入金のみ）⑤ダウンストリームの商品売買⑥子会社配当金の修正⑦連結精算表の作成の 7 点に限定しています。これだけでも、子会社資産の含み益、子会社を利用した売上計上、簿外債務の存在といった個別財務諸表だけでは分からない会計上の問題点に気づかせることができます。

全商簿記実務検定の受験にも対応できるように配慮しています。章・節タイトルで導入し、学習の疑問に答えながらレベルアップしていくステップ学習方式で理解を深め、検定問題を意識した問題演習で完結することができます。

また、編とびらについては、起業からグループ企業に成長するまでをイラストで示し、心身ともに成長していく高校生のイメージを重ねています。

科目『財務会計 I』の授業は、難解にならないような工夫が求められるでしょう。本書もその一助になればとよいと願っております。

（群馬県立前橋商業高等学校教諭 鈴木 友則）

商業 318 高校財務会計 I

新学習指導要領では、従前の『会計』から『財務会計 I』へと改称された。学習項目については、会計基準の国際的統合、連結財務諸表の作成に関する内容の充実が図られている。

様々な分野でグローバル化が進展するにつれ、基準や規格の統一が望まれるようになった。とりわけ会計基準の統合問題については、国際的な潮流を踏まえて、理解をしておくべき内容である。本書では、会計基準統一の背景、統一した会計基準の必要性、IFRS について、口絵部分で図解と共に解説を加えた。

連結財務諸表の作成については、わが国の開示制度が、従来の個別ベースから連結ベースへ転換を図ったことを踏まえた追加項目である。しかし、これらを十分に理解し体得させるためには、相当数の時間を要する。そこで、本シリーズ「高校簿記」では、本支店会計において、新たに合併精算表を導入した。これは、合併精算表の作成をとおして、企業結合会計の基礎を身に付けることを狙いとされたものである。従って、合併精算表を復習した後に、本書の連結精算表へと移行すれば、効率のかつ学習者に負担をかけることなく、連結会計の世界に導けるであろう。

高校シリーズは、検定試験への完全対応を特徴としている。全商検定は勿論のこと、日商検定で出題される発展的な内容も囲み記事として解説を加え、知識定着の確認のために練習問題を過去問題レベルで取り入れた。また、本文の表現を一定の文章レベルに維持している。これには、「検定試験問題の文章レベルに、早く慣れて欲しい。」という願いが込められている。とはいえ、要点整理が必要な部分や、つまづきが予想される部分には、図解を取り入れるなど、理解の一助となるような配慮も施してある。

本書により『財務会計 I』を十分に学習し、実社会においてわが国の発展に寄与する有能な社会人になることを、心から願っている。

（川口市立川口総合高等学校教諭 渡部 浩一）

商業 320 原価計算

学習指導要領の改訂により、指導内容がいくつか追加されましたが、その中の二点について、本書がどのように対応しているか説明します。

一つは、製造間接費の計算において、公式法変動予算を採用した場合の予算差異と操業度差異を取り上げ、製造間接費差異の原因別分析について理解させることです。本書は、第7章「個別原価計算」で製造間接費の予定配賦を扱いますが、そこに「公式法変動予算による予算の設定」も含まれます。従来標準原価計算で扱った内容ですが、それより前の時点で触れることになります。これにより予算の概念を基礎の段階から指導することができます。

もう一つは、度外税法による仕損じと減損及び副産物の基礎的な処理方法を習得させることです。本書では総合原価計算（第9・10章）の後に、第11章で扱います。減損は当月投入量が測定されているため認識できます。そこで第11章ではなく第9章から、すべての総合原価計算の設定間で生産データを示し、製造勘定のインプットとアウトプットを明確にしました。これにより減損や仕損じの説明がスムーズにできます。また生産データを明記することは、例題の解法を公式・ワークシート・ボックス図など様々な方法で説明できることにも繋がります。

上記以外は、基本的に旧課程の教科書「原価計算」の内容を踏襲しているため、安心して授業をすすめることができます。また、例題を豊富に掲げて、製造業における原価の計算や記帳について習熟できるようにしました。また、商業簿記と異なり、製造業固有の記帳体系となる箇所には勘定図等の図解や説明を充実させました。図解・イラストを充実させた理解しやすい教科書です。

前見返しは作業工具製造業の工場の実際がイメージできるイラストになっています。計算手続きはフローチャートを用いて解説し、月末仕掛品の評価は、図解と計算式により丁寧に解説しました。原価予測の方法（高低点法）などできるかぎりの学習要素を取り入れました。イラストも豊富で学びやすい教科書です。

今日、原価計算は企業で幅広く活用されています。生徒が本書で学び、簿記に加え会計の新しい役割と方法を習得し、幅広い知識を身につけることを期待しております。

（群馬県立前橋商業高等学校教諭 鈴木 友則）

商業 313 ビジネス実務

『ビジネス実務』は、第1部「オフィス実務」、第2部「ビジネスと珠算」、第3部「ビジネス英語」の3つの分野で構成されている。学習に当たっては、上記の3つの分野の中から、2分野以上を選択して指導することが求められる。

●第1部「オフィス実務」●

実際のオフィスの実務を円滑に行う能力と態度を育てるため、以下のような学習内容で構成している。

- ①企業の組織と人間関係…会社の組織や心がまえ、人間関係構築の必要性など。
- ②ビジネスマナー…訪問や受付案内、慶事・弔事などの交際のマナーなど。
- ③ビジネスコミュニケーション…ディスカッションや交渉、ディベートなど。
- ④オフィス業務…業務の進め方やオフィス環境の整備、給与計算の方法など。
- ⑤税の申告と納付…法人税額の計算と申告・納付、消費税の徴収・納付など。

<ビジネスコミュニケーション検定への対応>

平成25年7月より、全商ビジネスコミュニケーション検定が実施される。1年生の必修科目である『ビジネス基礎』と本書「ビジネス実務」の第1部「オフィス実務」分野を合わせて学習することで、ビジネスコミュニケーション検定の出題範囲をカバーすることが可能である。学習を深め、多くの生徒が受験することを期待したい。

●第2部「ビジネスと珠算」●

国際交流が進む今日において、我が国に伝統的に受け継がれてきた計算技法である珠算、また珠算によって身につく計算能力の高さは、諸外国の人々から高く評価されている。便利な計算機器が存在する中で、なぜ今もなお、そろばんが用いられるのだろうか。本書では、そろばんの持つしくみを知り、そろばんの実践的な利用方法を習得する。

●第3部「ビジネス英語」●

現在は、ビジネスの国際化が進み、日本企業の海外進出や、海外企業の日本市場への参入も増加している。これに伴い、職場でのコミュニケーションの手段として、世界の共通語である英語の持つ役割がますます重要になってきている。本書での学習を一つのステップとして、生徒たちが立派な国際人になれるように指導したい。

（東京都立葛飾商業高等学校教諭 小倉 俊悦）

商業 315 商品開発

いよいよ新科目『商品開発』が誕生する。学習指導要領作りから参加したので、もう7年になる。ここ数年、先生方からよく聞くのは「『商品開発』なんて教えられるのだろうか」という不安の声である。ぜひ安心していただきたい。この教科書は、「誰でも面白く教えられる」を念頭に作られた逸品である。

●事例を豊富に

花王株式会社、株式会社ブリヂストン、べんてる株式会社、ミズノ株式会社…今回の事例掲載に協力してくれた企業の一部である。その企業数は70社を超える。身近な商品・事例が盛りだくさんである。

●流れをわかりやすく

「今どこを学んでいるか」、教える方も教わる方も迷子にならないよう、章ごとに商品開発の流れが繰り返し提示されている。①消費者が困っていることを調べ、②それを解決するアイデアを考え、③アイデアに沿った中身と外身を作り、④買ってもらえるように消費者に伝える…要はそれだけである。生徒が考えながら学べるテンプレートも充実している。

●どの先生にも商品開発を

商品開発は、すでに多くの商業高校でさかんに行われている。「商業高校 商品開発」とWebで入力すると驚くほど多くの商品が登場し、学校のPRにもなっている。素晴らしい取り組みだと思うが、今までは、マーケティング科目が得意な一部の先生が、課題研究の時間などに行うケースが多かったようである。この教科書を使えば、そういった先生でなくても商品開発を教えられる。もちろん、今まで独自に挑戦していた先生にもぜひ使ってほしい。体系的にまとまっているので進め方も楽になるし、レベルも上がるに違いない。

●全国ロボコンならぬ商品開発コンテストを

NHKのロボコンは今年で25年を迎える。全国の高専の学生たちが青春をかけてロボットづくりに情熱を燃やす姿は、見ているものを魅了する。商業高校にも商業高校生らしい全国大会があってもいいのではないか。新科目『商品開発』が設置されるこのタイミングでそんな声が聞かれ、そういった準備を進めているといううわさも聞く。ぜひ、これに乗り遅れないように『商品開発』を開講してはいかがだろうか。「ヒット商品を生み出す常連校」商業高校・商業教育の大切さに光が当たるチャンスだと思う。(株式会社アイ・コーポレーション代表取締役社長 小川 亮)

商業 316 ビジネス経済

(1) 新科目『ビジネス経済』

新科目『ビジネス経済』では、求められる教育効果が従来の商業科目とは異なっている。簿記・会計・情報処理などの科目では知識や制度の理解を求められるのに対し、本科目は、様々な経済現象を「モデル化」し、「仮説」を設定した上で、実際に起こっている現象の成り立ちや行く末を究明していく「考え方」や「方法論」の習得が求められる科目である。

(2) 教科書「ビジネス経済」の魅力

本科目の教育効果を十分に上げるには教員が教えやすく生徒が学びやすい、羅針盤となるべき教科書が必須となる。実教出版の教科書「ビジネス経済」はイラストやグラフを豊富に使い、事例を身近なものに限定し、生徒がわかりやすく、興味を持ちながら学べる工夫を随所に施している。章の構成もこだわっている。第1章で全体を概観したあと、第2章で経済学の基礎となる需要と供給の仕組み、第3章では身近な商品の事例で価格決定のメカニズムを学ぶ。第2章と第3章で「ミクロ経済学」の基礎を固めることができる。第4章では経済成長と景気循環、第5章では経済政策を学ぶ。第4章と第5章で「マクロ経済学」の基礎を固めることができる。「マクロ経済学」の学習では、現在話題となっている「アベノミクス」と関連付けて指導を行うと効果的だろう。章の構成は、授業が展開しやすいように配置しているが、第1章を学んだ後に、第4章、第5章を先に学んでも一向に構わない。

(3) 卒業後を見据えて

近年、商業高校の生徒にも進学志向が高まっている。大学や短大に進み、ビジネスをさらに深く学びたいと考える生徒も多い。経済学部や商学部に進学し、経済学を学ぶ際、その入門書は膨大なハードカバーを指定されるが、この教科書は経済学の基礎となる考え方や用語を140ページほどでまとめている。本科目の学習を足がかりに経済学に興味を持ち、長い時間をかけて深く学んでほしいという願いも込めて、この教科書は編修されている。また、将来起業したいと考える生徒にも、価格弾力性、市場の性質など、ビジネスの意思決定において必要な考え方を確認できる。卒業後も座右の書となる一冊である。

(神奈川県立厚木商業高等学校教諭 岩村 夏樹)

商業 322 ビジネス情報

(1) 情報化の進展と新しい教科書の位置づけ

『ビジネス情報』は、エンドユーザコンピューティングの進展を背景に、個人の業務にコンピュータを活用する能力や、オフィスの情報化リーダーとなるための知識・技術を身につけることを目標に設定された。今回の改訂では、ネットワークやデータベースを連携させた情報システムと、これを利用した新しいビジネスモデルが次々と創造されている現状に対応し、ネットワークやデータベースの活用及びオフィス系のソフトウェアを利用したシステム開発の内容を充実させ、今日のオフィスで求められる情報活用の実践力を育成することを目指している。

(2) 実践力の深化 ■演習で実践力を身につける■

本書の目標の一つは、科目『情報処理』で学んだ知識を実務で活用できる実践力にまで深化させることにある。このため、座学中心である第1章においても、生徒が将来の職業人としての自覚を持てるような視点での記述を心がけている。また、第2章「情報通信ネットワークの活用」以降は、オフィスでの実務に即した例題形式の学習と演習により、単に知識を習得するだけでなく、実務で生かせる実践的な能力を育成することを目指している。

(3) 資格取得 ■検定上位級の表計算、データベース、マクロ言語に幅広く対応■

この科目を学ぶ動機付けとして、資格取得への対応にも配慮している。用語や表計算は、教科書「最新情報処理」でも全商1級レベルに対応しているが、本書の例題学習でさらに深く学ぶことにより、じっくりと1級の実力を身につけさせる指導が可能である。また、データベースやマクロ言語は、本書で初めて学ぶため、Access（データベース）やExcelのVBA（マクロ言語）を用いた具体的な例で、プログラミングの入門から検定レベル、さらに実務的なシステムの開発までを演習形式で学べるよう取り扱っている。

(4) 学び続ける力の育成

例題では、課題を発見して自らの力で解決しようとする姿勢の育成を重視している。また、必要に応じて情報処理技術者試験（ITパスポート）レベルの内容も取扱うことにより、生徒が興味・関心を高め、『ビジネス情報管理』等の上位科目の履修や、情報処理技術者試験などの高度資格取得の学習を継続する動機付けとなるよう図っている。

商業 324 最新プログラミング オブジェクト指向型言語

オブジェクト指向型言語であるJavaによるプログラミングに求められる知識と技術について、数多くの実習を行いながら習得させること。また、プログラムの役割や重要性について理解させるとともに、ビジネスの諸活動にコンピュータを合理的に活用する能力と態度を育成することを目標として編修した。

とにかくプログラミングは、実習を中心に展開すべきとの考えを軸に、例題を豊富に用意し、各例題から身につけるべき知識を解説している。そして、練習問題や実習問題へと導くことで、知識・技能の定着が図れるように構成した。

Javaの統合開発環境として、フリーソフトでもあるEclipse（編修時はEclipse3.7）を想定し、Javaによる開発手順をキャプチャ画像とともにわかりやすく表現をしている。また、ソースコードにおいても開発時に見えている状態をそのまま掲載している。

ソースコードの入力については、最初のみエディタの入力補完機能を利用する形で説明を行っているが、それ以降は、すべてのコードを各自が入力することを推奨する。エラーメッセージや実行結果をすぐに確認できるため、スムーズな実習展開ができるものと思われる。

第2章「プログラミング基礎」では、基本的な内容を取扱い、プログラミングの手順→データの入出力と演算→アルゴリズムの表現技法→条件判定とくりかえし処理といった順番で展開する。そして、第3章に入る前に「オブジェクト指向の考え方」について触れ、イメージしやすいように工夫をした。

第3章「プログラミング応用」では、メソッドの利用→配列の利用→例外処理とストリームとして、集計や探索、順位付け、並べかえ、二次元配列といった具体的な処理の流れ図やイラストを用いてわかりやすく表現している。

第4章「Javaの活用」では、Swingを利用したGUIプログラミングを体験する。様々なGUIコンポーネントを利用した例題を用意し、イベントドリブンプログラミング（イベント駆動型プログラミング）、文字や画像などの処理を体験する。

コンピュータの関連用語やハードウェア・ソフトウェアの内容については、「プログラミングCOBOL」の内容を再度見直し、イラストや順序を変更している。難解なイメージの払拭を心掛けて編修した。

（千葉県立千葉商業高等学校教諭 鶴野澤 博）